

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第31回 『学問のすゝめ』に見る、対面と実学の大切さ

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉をご存知でしょうか。これまで約40年間にわたり、日本の1万円札の肖像画として親しまれてきた福澤諭吉が明治5（1872）年2月に著した『学問のすゝめ』の書き出しの文章であり、現代の日本人は皆、どこかで1度は見聞きしています。原文は旧かな遣い、漢字カタカナ交じり文ですが、わかりにくいので、ここではひらがな交じりの現代かな遣い（慶應義塾大学出版会刊『福澤諭吉著作集 第3巻 学問のすゝめ』による）で表記しました。（以下、引用の場合は同じ）

この文章を読んで、「福澤は共産主義者であり、究極の平等を追求していた」という人がいますが、それは大間違いです。普通、この文章を引用する場合、ここまでしか表記しないことが多いので、そういう誤解が生まれたのかも知れません。実は最後の「…人を造らず」の後には「と云えり」と書いてあります。そして、その4行後には「されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と坭との相違あるに似たるは何ぞや」として、実社会は決して皆が等しくないことを指摘し、その理由を読者に問うています。続けてその答えとして、「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由て出来るものなり」と断じています。

ちょっと古めかしく、難しい表現ですが、これを簡単に言えば、「人が生まれてきたときはみな平等だが、学問をするかしないかで大きな差がつくものだ」と言っているわけです。だから、『学問のすゝめ』は、全ての読者に対して、学問をすることを奨めているのです。

この書物は、今から151年も前に木版印刷で刊行されたものであり、20万冊が売れ、無断で書き写して出版した偽版が2万冊以上出回ったとも言われています。当時の日本の人口3,500万人と比べると、国民160人に1人がこの本に触れたことになります。あまりの反響の大きさに福澤は、明治9（1876）年までの4年余りの間に17編までの続編を書きました。1編ごとは数分で読めるほどの短文ですが、その出版合計は明治13（1880）年7月までに70万冊に達し、各編ごとにテーマを定め、学問の必要性を説いています。

たくさんの人に読まれたということは、一般読者が国民生活に何が必要かを探し求め、この本

と出合ったことをきっかけに、学問が必要だということを理解したのではないのでしょうか。

そのため福澤は、全17編を1冊にまとめた合本を出版しました。明治34(1901)年に福澤が亡くなった後も様々な形で版を重ね、初版から150年を超えた今でも新しい出版があり、日本国民に読み継がれています。

これだけのロングセラーは世界でも^{めづら}珍しいでしょう。そして、21世紀の今、その本を読んでも、今の時代にふさわしい心構えや知識が身につきます。現代語訳や外国語訳も出ていて、簡単に読めますので、興味ある方は本屋さんで手に取ってみてください。本の宣伝をするわけではありませんが、『現代語訳 学問のすすめ』(ちくま新書)、『図解 学問のすすめ—カラリと晴れた生き方をしよう』(ウェッジ)、『まんがでわかる福沢諭吉「学問のすすめ」』(Business Comic Series)などが、現代語で書いてあり、読みやすいかもしれません。因みに、「すゝめ」と「すすめ」は同じ言葉です。また、「福沢」は「福澤」の常用漢字表記です。常用漢字は、現代の日本語を書き表す漢字の目安です。

なんで、150年前の出版の話をもとに長々と書いたかということ、そこに書いてある社会常識が今の時代に守られていなかったり、忘れられていることがずいぶんあるのが気になったからです。

例えば国会では、憲法改正を議論する参議院憲法審査会の^{りっけんみんしゅとうひつとうかんじ}立憲民主党筆頭幹事が、「同審査会の週1回開催が多すぎる」として、メンバーを「サル」に例えて評したことが、批判を浴びています。また、元総務相の放送法にかかわる発言があったかなかったかが衆議院本会議や予算委員会での議論にもなりましたが、公務員が作ったはずの議事録の正確さが問われながら、攻守双方も十分な証拠を示すことをせず、うやむやになったままです。

参議院の立憲民主党と社民党の会派に所属する3人の議員全員が法務委員会で、党方針では反対している法案に賛成してしまい、本会議での採決を棄権することがありました。^{せいじかじよし}政治家女子

^{フォーティエイトとう}48党(旧NHK党)では、除名された党首が「自分が党首だ」と主張し、党内で対立しています。

いずれも、党の方針の確認を^{おこた}怠ったり、自分の主張を言いつばなしで、相手の考え方を押し量ったり、話し合っ^{だきようてん}て妥協点を見つけ出すという努力が行われていません。『学問のすすめ』の8編は「我心を^{もつ}以て他人の身を制すべからず」との標題が付けられています。まさにこうした、自分の考えを一方向的に押し付けるだけの議論を^{いまし}戒めているのです。

また、一方で、4月6日付の『産経新聞』(東京発行)に掲載された「^{あびるるい}阿比留瑠比の極言御免」

には、「危機に想像力足りない日本」という見出しが躍っています。

このところ北朝鮮は頻繁にミサイルを日本海に向けて発射しています。2023年3月28日には、金正恩朝鮮労働党総書記がその前日に戦術核弾頭「火山31」を視察したとする写真を公開しました。その弾頭の直径は推定40～50センチで、米国を威嚇する大陸間弾道弾ではなく、日本と韓国を標的にする戦術ミサイルに搭載できるよう小型化したものだとみられています。これに対し、4月5日の自民党国防部会では防衛当局者が「そこまでの技術の完成がなされたという証拠は一切確認されていない」と述べました。それに先立つ3日には韓国の国防相が「軽量化、小型化した戦術核兵器の可能性はある」と述べていることに日本の政府・与党は一切触れていないことをこのコラムは指摘し、「問題を矮小化（注1）している」「危機に想像力が足りず、国民の命が危ない」と危惧しているのです。

政治学では、「国家の基本的要件は、国民の生命、財産と領土を守ること」と教えられます。今の日本の政治・行政は、こうした基本的なことを理解して議論しているのでしょうか。

筆者の友人で、学生時代に水泳選手として静岡県下田市から東京・伊豆大島までの当時の遠泳最速記録を樹立し、社会人としては日本最大手の損害保険会社を経営していた人がいます。彼は「私はzoomが大嫌いだ」と言います。「zoomなどのオンライン会議では、必要な議論ができるものの、大切なのはその前後だ」というのです。すなわち、会議が始まる前の雑談で、手で相手の肩を叩き「この前、貴方が言っていたあの話はどうなりました？」というような話をするところから友人ができたり、新しい仕事のヒントを得たりするそうです。そして、その時の相手の表情や肌感覚で、話の進め方を判断するというのです。

この3年間、新型コロナウイルスに翻弄され、ビジネスマンや政治家にとっては、出張や訪問挨拶の多くが、オンラインで代行されるようになりました。移動がなくなり、即時に相手の顔が見られることで、時間や経費が大幅に節約されたことは合理的で、経済的にも効果がありました。ですから、コロナ規制が緩和された今日でも、そうした習慣が続いていますが、その結果、肌感覚が伝わらず、ギスギスした人間関係になっているのではないのでしょうか。

そうしたコミュニケーションになれた人たちが、自分の頭の中だけで考えた理屈に囚われ、言いつばなしで相手を攻撃したり、責任を取らなかつたりしても平気になってしまっている面があるのは認めざるを得ません。

ロシアによるウクライナ侵略をめぐり、ウクライナを支援する各国首脳は頻繁にオンライン会議を開きました。そのことで、表面的な約束事は話が通じますが、深層の相互理解は進んでいるかどうかわかりません。ですから、一堂に集まる5月の先進7カ国首脳会議（G7広島サミット）

が大切なのであり、その下準備として議長である岸田文雄首相は欧米各国を歴訪したほか、中立国のインドを訪問し、その足で、日本の首相としての前例を覆し、戦時下にあるウクライナに入り、ゼレンスキー大統領と握手して会談に臨みました。

百聞は一見に如かず。そして、相手の目を見て語るコミュニケーションの重要性を認識しているからこそ、こういう外交を行うのでしょうか。一般の生活や仕事においても、事実を自分の五感で確認し、相手の言っている事や立場をよく理解することを忘れてはならないということが、コロナ禍に翻弄されたこの3年間の生活を振り返り、極めて重要だと認識する次第です。それこそが、福澤が生涯説いたという事実に基づいた学問、すなわち実学の大切さなのでしょう。

(注1) 物事を小さくする・小さく見せる・こじんまりさせる